

ほっかいどう NIE 通信

Newspaper in Education 教育に新聞を



発行 北海道NIE推進協議会

〒060-8711 札幌市中央区大通西3丁目6 北海道新聞社内
TEL 011-210-5802 FAX 011-210-5826

本年度実践校

全校挙げた活動も

家庭の新聞離れは加速

2005年度の道内NIE実践校は、秋の深まりとともに活動も佳境に入っている。全校挙げて推進組織を設置し、各教科で新聞を活用するなど、積極的な取り組みが見られる一方で、新聞を購読しない家庭や教師の増加など、環境変化の厳しさも目につく。

NIE実践校は本年度、道内で小、中、高校合わせ41校(新規20校、継続21校)認定され、2年連続全国最多の校数となった。実践校の多さばかり

NIEの実践校になったのは、定時制に赴任して間もない頃であった。予算が少ない定時制にとって、各社の新聞が届くのは大変ありがたかった。生活指導や進路指導にタイムリーな記事が多く、毎日



岸 美千代

旭川商業高定時制教諭

新たな実践を模索

そういう機会が一気に減り、寂しい思いをした。現在は個人購読の新聞と全日制購入の新聞を利用している。担当する国語の授業では毎年、生徒が新聞記事を用いて原稿を書き、発表する授業を行っている。今年も2学期に実施している。生徒の関心

が高いのは、郵政問題やスポーツ、少年事件だ。ふだんは新聞を読まない生徒たちも、友達や教師の手を借りながら新聞を理解しようとする。その姿を見るたび、NIEを必ず授業に取り入れる必要性を感じる。しかし、定時制で職業科の

ため、1科目につき授業は週に2時間しか展開できない。切り抜きをしたときはタイムリーな記事だったのに、発表するときは古い記事になってしまふ。発表直前に新しい記事を提供することもあるが、生徒全員にはなかなか提供できない。

高学年になると、授業でパソコンに親しんでいるせいもあり、新聞よりもインターネットを活用すべきだとはっきり申し出る生徒もいる。インターネットと新聞のそれぞれの長所や短所を説明したり、話し合ったりするが、パソコンに慣れた生徒は圧倒的にイ

白百合学園中学高校、札幌旭丘高、鹿追町立鹿追中、豊頃町立茂岩小など、学校ぐるみでNIEに力を入れる学校は少なくない。これらの学校に共通するのは、管理職がNIEにきちんと絡んでいることだ。

個別の新しい動きとして目につくのは、英字新聞の活用だ。本年度は中学校と高校の計6校のほか、小規模校ながら学校挙げてNIEに取り組みする足寄町芽登小でも英字紙を購読。同町と姉妹関係にあるカナダ・アルバータ州ウェタスキウィー市出身のALT(英語指導助手)の指導で、子供たちの国際交流などに役立

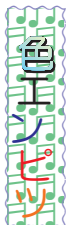
ている。こうした活発な取り組みの一方、北海道NIE推進協議会主催の地域セミナーなどで最近、先生たちが必ずといってよいほど口にするのは、児童生徒の家庭や同僚教師の新聞離れ。「以前は子供たちに家で新聞の切り抜きをするよう簡単に宿題を出せた。ところが、最近では3分の1の家庭が新聞を取っていないクラスもある。若い先生も新聞をあまり読まない」。そんな嘆きの声が聞かれる。道内では全世帯の30%が新聞を全く取っていないという最新データもある。NIEにとっても、重たい数字だ。

インターネットを支持する。NIEの実践も、情報機器を活用した実践が増えていくのではないだろうか。IT教育やメディアリテラシー等、教科を問わず学校にさまざまなものが求められている。一人の教員では対応しきれない私のようなアナログ人間には大変な時代である。

しかし、インターネット等の情報機器を活用することによって、世界の情報を早く入手したり、世界的な事件や芸術の評価などの各国の取り扱いを比較したりできたら、生徒にとって新聞や新聞記事はむしろ身近なものになるだろう。NIEの実践を知ってもらうすぐ10年になる。温故知新の精神で、新しい実践のあり方を模索していきたい。

善玉から悪玉へ

アスベスト(石綿)、昔は善玉であった。天然の鉱物繊維で断熱性、耐火性、絶縁性があり、しかも細工がしやすい。安価な優れものであった▼1986年、WHOがアスベストは人体に害を及ぼすと勧告を出した。しかし日本では対応が遅れ学校の体育館や教室、音楽室では吸音材として最近まで使われていた。理科の実験では金網として子供が使っていた▼身近にあったアスベストの健康被害が広がって悪玉となった。綿のように軽いアスベストは古くから飛散する。それを吸引すると中皮腫や肺がんの原因となり、多くの死者を出した▼新聞は報じる。アスベスト処理のため、道内の15の小中学校が臨時休業となった。中頓別町の小頓別小中学校では体育館を区切った授業が1カ月を過ぎた。300校近くの学校でまだ理科の実験に使われていることが分かった▼アスベストの危険性を長い間放置したつけが、子供たちに回ってきている。子供を犠牲にしているいけない。正常な学校生活を一日も早く取り戻したい。悪玉を隠すことはできなかった。WHOの勧告を無視した報いは大きい。(高)



周囲の協力が不可欠

NIE実践校となって2年目。残す期間は半年間となった。これまでの実践活動を振り返ってみたい。

当初公民、情報、総合的な学習の時間での活用を目論んで始めた。現時点では情報、総合学習では結構有効に活用されている。ただ、公民科での本格的な活用はこれから。とにかく新聞が身近なメディアと感じられるようになることを最も心掛けている。



毎朝登校すると職員玄関前に設置してあるNIE用新聞受けから新聞の束を取り出し、生徒ホルのNIEコーナーに並べる。これはNIEの実践を一緒に行っている公

民科の川瀬雅之先生と、どちらかが行うことになっていく。当然早く来た方が行うことになる。一人じゃ辛くても、二人で行っていると意外と苦にならない。もちろん前日の夕刊も一緒なのでかなりの量になる。月曜の

がある折り込み広告は販売店さんに折り込まないよう依頼し協力していただいている。そう、NIEの実践は多くの人の理解と協力無くして行うことはできないのだ。分厚い新聞の束を抱えて歩いていたり、NIE

10分ほどかかるが、同時に各紙の一面を素早くチェックする。短時間なので大見出しと目次を眺め、情報やHRで使えそうな記事を見つけるとすかさずコピーして教室に掲示する。生徒ホールで新聞を広げた生徒や、掲示してある記事を読んでいたり、記事の話題で盛り上がりがあったりする生徒達の姿を見るのが最高の楽しみである。

生徒達は同じ記事を読んでも様々な受け取り方や考え方があつて、それを学べる。様々な実践を継続して行っていくための仕組みを作り上げていくことが今後の課題だ。

札幌旭丘高教諭

高瀬 敏樹

NIE実践校奮闘記

表現力の育成に活用

本校はNIE実践校に昨年度指定されました。今年も、C型(6ヵ月5・6・9・10・11・12月)で取り組むことにしました。新聞は朝玄関ホールにならべ、放課後、報道常任委員が図書室に運びます。図書室では図書局員が管理します。多くの生徒が関わることで、NIE実践校に対する関心を高めていきたいと考えています。



2年目を迎え、玄関

壁新聞の内容を決める際、図書室の新聞を参考にしたり、記事の内容を深めるための調査に新聞を活用したりするようにになりました。授業では、1年の選択

さらに授業等で積極的に活用していく予定です。現在、実践中ですが、いくつか課題があります。1つ目は実践の広がりについてです。教職員全体の理解を得て始めまし

の全国大会で十勝新聞教育研究会の考え方を提案させていただきましたが、「だれでも」できる、「目標にのびて行く」新聞教育に取り組んでいきたいと考えています。

2つ目は新聞の整理等についてです。英字紙を含め毎日7紙(朝日 毎日 日経 産経 道新 十勝毎日 デイリー 読売)が届きます。1回スクラップ作業を行うだけで、その後の整理が大変になります。今後は生徒の活動をうまく組織しながら、新聞に親しみやすい環境を作り上げていきたいと思っています。

帯広市立帯広第五中教諭

森田 昌宏

社会で新聞スクラップ作業に取り組み、その成果を生かした学習で新聞を作成しました。新聞記事をもとに自分達の考えを新聞という形で表現することができました。今後、

たが、学級活動や授業等で活用することが少ないように感じています。実践例を紹介するなどして、活用の輪を広げていきたいと思っています。8月に帯広で開かれた全新研

北海道でこの夏に行われた作文コンクールで、産経新聞社賞を受賞した小学生のお母さんから「表彰式の様子が報道した新聞がほしい」という電話をいただいた。申し訳ないが、産経新聞は道内版がないので、記事掲載していない。表彰式の様子を撮影した写真をお送りし、紙面で報道できないことをお詫びした。北海道NIEでも、各紙と同様に告知記事を出したいのだが、スペースがなく、皆様に迷惑をおかけしている。

ところが、北海道NIEでは、意外に多くの学校が、産経新聞を利用してくださっている。東京版を朝の飛行機で北海道に運ぶので、学校に新聞が届くのは、夕方か翌日になる。それでも、多くの先生が産経新聞の紙面を授業に使ってくださっている。感謝する。札幌支局としては「現地版がない」と、北海道の子供たちが読むのにふさわしい記事を多く掲載するように努めている。また、配達してくださる北海道新聞社さんとの連絡を密にとり、細心の注意を払っている。一方、東京本社では、NIEの全国での活動の告知記事を積極的に掲載するほか、東京本社や浦安印刷センター(千葉県浦安市)などでは、小中学校から、新聞製作現場の見学希望があれば、積極的に応じている。

地道な努力と感謝 忘れず



△産経新聞社編集局札幌支局長 對馬好一▽

はいえ、正確で少しでも早い記事を書かなくてはならない」と、北海道の子供たちが読むのにふさわしい記事を多く掲載するように努めている。また、配達してくださる北海道新聞社さんとの連絡を密にとり、細心の注意を払っている。一方、東京本社では、NIEの全国での活動の告知記事を積極的に掲載するほか、東京本社や浦安印刷センター(千葉県浦安市)などでは、小中学校から、新聞製作現場の見学希望があれば、積極的に応じている。

子供たちに新聞への親しみを持ってもらい、将来の新聞読者育成のため、地道な努力が必要だと思ふ。

木古内・鶴岡小

「新聞って楽しい」

「総合的な学習の時間」でのこと。インターネットでの調べ学習は、キーワードで検索するとたくさん情報が出てくる。それを印刷し、模造紙に貼り付けて「完成」と満足げな子供たち。しかし、字や言葉の意味を理解していないことが多いのである。

また、インターネットを使い始めてから図書の活用が激減した気がする。子供たちは、図書よりもインターネットから得る情報の方が魅力的で楽しそうなのである。なんとか子供たちが図書とふれあう時間を多くしようと思ひ立ち、

高木 かず子教諭



新聞を使って調べ学習

調べ学習資料に最適

読書活動を増やす計画を進めてきたが、調べ学習は別である。古い資料では調べきれないことが多い。そこで考えついたのが、以前から注目していた「NIE」である。始めたのは昨年の2月から。書店に行き実践資料を集め、その中から「新聞名人」へのパスポート(総合的な学習で新聞名人)東洋館出版社)に取り組んだ。テレビ欄しか見ていなかった子供たちが、毎回新聞を楽しんでくれた。初めは時間が掛かっていったのだが、慣れてくると探したい記事がどこにあるのか見当が付き速くなってきた。最後のまとめでは、「楽しかった。毎日、家で新聞を見ている」と好評だった。

今年は九月後半から、「環境」を大きなテーマとし、その資料の一つとして新聞の記事集めを始めた。昨年度から持ち上がったの六年生4名と今年受け持つ五年生6名を三つのグループに分けて取り組ませている。テーマに関係ない記事で大騒ぎしたり、びっくりしたりしながら、にぎやかである。少し苦労して資料を探すが、読まなければ関連ある資料がわからない。必要な資料だけ切り抜ける。資料を探している時に思わぬ出会いがある。そんな「新聞」という魅力的な資料を通して、活字離れ、読書離れの子供たちに楽しみながら学習してもらいたいと願っている。

新実践校
レポート

肉面成長にも一役

別海高 (定時制)



生徒ホールでの新聞閲覧

浅野 浩教諭

本校は今年度NIE実践校として認定いただき、本格的な活動はこれからといったところですが、これまでに学校・酪農科全体でいくつかの活動をしてまいりました。

まず、一つ目は「みらい君の広場」への投稿です。北海道新聞の木曜日に毎週掲載されている「みらい君の広場」に投稿するため、酪農科の国語の授業時間を割いて作文を書いています。当初は、掲載されるような作文を書かせるこ

とができるのか、授業時間を割いてまで行っているのか、等戸惑いを感じていました。実際にやり始めてみると、掲載されることを励みに頑張る生徒が多く、授業時間を割いても作文指導をした意味があったと実感できました。

なかでも、作文指導をしていく中で「自分の考えを表現できる」だけでなく「自分の考えをまとめる」ことができることに大きな意味を感じています。何気なく過ごしてしまいう日常を振り返ることで、これからの自分が変わっていく、自分はどうな考えを持っているのか考えることで、自分という人間がわかってくる。「みらい君の広場」への投稿は国語力の向上のみならず人間の成長においても効果があると感じています。

投稿で「自分」見つめる

生徒徒共有スペースに新聞を置き、いつでも閲覧できるようにしています。地方紙が二紙閲覧できるため、読み比べもでき、始業前や休み時間、放課後などの空いた時間を自由に使っています。最近では閲覧室に新聞が届くのを待っている生徒もおり、徐々に身近になってきていることを実感しています。

今後は、興味を持ち始めた新聞から情報を得て、それを活用していく力をつけさせる実践を行いたいと考えております。

初の実践交流会
成果や課題報告

NIE研究会
本年度発足した北海道NIE研究会の初の公式事業となる第1回実践交流会が9月22日、北海道新聞本社で開かれた。まず、日経新聞札幌支社の松井正憲編集部長が、米国在任中の「9・11」同時多発テロの取材体験を交えながら、「歴史」を伝える報道の使命について熱く語った。

この後、札幌市日新小の上田繁政教諭、同市米里の中田重貴江教諭、同市清田の野本正信教諭が実践発表や報告を行った。発達段階に応じた学年ごとにコラム記事を使い分けるなど、各校の実践の成果や課題を出し合い、交流を深めた。

「カニカニ新聞」全国最優秀

枝幸・音標小の福島君兄弟

わがまち新聞コンクール

初の N I E 週間 (11 月 7 - 13 日) の関連行事として小中学生と高校生から作品募集していた「わがまち新聞コンクール」で、枝幸町音標小 6 年の福島義己 (よしき) 君と同 4 年の教矢 (たかや) 君兄弟が作った「枝幸カニカニ新聞」が、全国 2300 点余りの応募作のなかで 1 位に当たる最優秀賞に輝いた。また、夕張市清水沢小 6 年の小野真如月 (きずな) さんと島谷祐希さんの「ばりばりゆうばり」も小学生部門の最優秀賞に選ばれ、北海道勢の活躍がひときり目を引いた。

同コンクールは、日本新聞教育文化財団が、地域の名物や話題などを題材に手作りやパソコンによる新聞を募集。160 点の応募があった道内では北海道 N I E 推進協議会を支える報道 12 社が共催して北海道独自の表彰を行った。

「枝幸カニカニ新聞」は道内の最高賞に当たる同協議会会長賞、「ばりばりゆうばり」は優秀賞 (時事通信社賞) にそれぞれ選ばれ、全国審査に推薦された。全国入賞者の表彰式は 11 月 12 日に東京・内幸町のプレスセンターで行われる。

北海道表彰の他の入賞作品は次の通り。

◇優秀賞 ▽毎日新聞社賞 赤井川村都小 5 年「みやこ新聞」▽共同通信社賞 函館市桐花中 1 年「故里」▽朝日新聞社賞 苫小牧市明倫中 3 年 1 組「昇竜」以上 3 点は全国審査に推薦▽読売新聞社賞 熊谷季代里、中西茜 (上富良野町東中



全国最優秀賞に輝いた「枝幸カニカニ新聞」

「生きる力育む」テーマに

第 10 回北海道 N I E 研究大会が 11 月 18 日午後 2 時から、札幌聖心女子学院中学・高校 (札幌市中央区宮の森 2 条 16 丁目) で開かれる。北海道 N I E 研究会と、北海道 N I E 推進協議会の主催。

教師を中心とした研究団体の北海道・新聞教育研究会 (北新研) が発展的に解消し、

札幌で来月 18 日 N I E 研究大会

北海道 N I E 研究会となったから初めて迎える大会で、「生きる力」を育む N I E 1 多面的なものの見方ができる子どもへの育成を目指して」がテーマ。

札幌市宮の森中の及川永江教諭と、会場校の札幌聖心高校の松原今日子教諭が、それぞれ社会科の公開授業を

行った後、岩見沢市美園小の柳谷直明教諭と札幌市発寒中の荒島晋教諭 (理科) から実践発表がある。また、新聞社が制作した N I E モデル授業のビデオ上映なども行われる。

参加申し込み・問い合わせは、同研究会事務局長の野本正信教諭 (札幌市清田中 電話 011・881・2034) または N I E 推進協 (電話 011・2210・5802) へ。

釧路・北見でセミナー



新聞を活用した授業などを実践する先生たちの「セミナー」写真Ⅱでは、伊

道教育大釧路校の道大釧路校の学生も多数参加し、さまざまな実践事例を熱心に聞き入っていた。

このうち、廣川教頭は、教科ばかりでなく、「学校だより」を通じて地域との交流など、学校活動全般に N I E が登場する計画別中の組織的な取り組みを紹介した。

今回のセミナーには、初めて N I E 講座を開講した地元の道大釧路校の学生も多数参加し、さまざまな実践事例を熱心に聞き入っていた。

道教大生も熱心に

小 4 年、3 年「かみん新聞」▽日経新聞社賞 足寄町芽登小 6 年「芽登新聞」▽産経新聞社賞 萬和馬、高石翼、三浦憲 (釧路別保小 6 年)「長ぐつアイスホッケー新聞」▽北海道新聞社賞 遠藤瑞穂、大塚美咲、土上綾香

(札幌市新陽小 6 年) ▽十勝毎日新聞社賞 按田萌子 (豊頃町茂岩小 5 年)「酪農新聞」▽室蘭民報社賞 岸田七瀬 (室蘭市桜が丘小 5 年)「室蘭新聞」▽釧路新聞社賞 菅原文香 (釧路市城山小 6 年)「タンチョウニュース」▽苫小牧民報社賞 苦小牧市明野小 2 年「ほいく園しん聞」

◇特別賞 ▽中標津町計根別中 3 年「久遠」Ⅱ全国審査に推薦▽上ノ国町小砂子 (ちいさ) 小 3 年・4 年「私のふる里海の町」

編集後記

高校野球ではないが、「北海道はすごいぞ」と、心の中で叫んでしまったこのページで報じている「わがまち新聞コンクール」の審査結果を知らされたときである。

「全国」と、小学生部門の最優秀。4 つある上位入賞の席のうち、2 つを北海道の子供の作品が占めた。

とくに、「枝幸カニカニ新聞」は漁獲量日本一の毛ガニ漁の将来予想から、「達人」の密着取材、おいしい食べ方まで、毛ガニのことがひと目でわかるカラフルで楽しい「わがまち新聞」だ。

実践校の数で全国一となった北海道の N I E が、「量」だけではないことを今回、子どもたちが示してくれた。

(K)

一方、北海道新聞北見支社で開かれた N I E 北見・オホーツクセミナーで注目されたのは、北見市にあるオホーツク社会福祉専門学校の藤田禮三校長の実践発表。介護福祉を学ぶ生徒たちが、お年寄りとの会話の題材集めなどで新聞をよく読むようになった事例が紹介された。

このほか、北見市北小の工藤仁志教頭、上湧別中の鈴木玲教諭、留辺蘂高の徳富圭教諭が、日ごろの活動を報告した。